

## アイヌなるものを探し求めて

宇梶静江

私はいま83歳です。姉や両親、そして祖先のもとに行く日もそう遠くないと思っています。23歳で東京に出て、和人と結婚し、<sup>38</sup>39歳になったときに、朝日新聞に「ウタリよ手をつなごう」という文を寄稿しました。それがきっかけになって、首都圏アイヌの運動が始まったと言われています。しかし、私は政治的な運動をするつもりはありませんでした。アイヌとして死にたい、粗野かもしれないが、アイヌブリの弔いの儀式で先祖のもとに行きたい。そのために、東京の地でもウタリと集りたい、集って胸襟を開いて、これまでの喜び、苦しみ、悲しみを語り合い、アイヌとしての自分を確かめたい、それだけの気持ちでした。

私にはアイヌの血が流れている。アイヌの血が私を突き動かしてきた。それは確かなことです。しかし、アイヌの血が私に語りかけていることが何なのか、それを言葉にすることはなかなか出来ませんでした。

朝日新聞に寄稿してから四半世紀たって、63歳でアイヌ刺繍を習い始めました。そのとき、ある展示会で見た作品がヒントになって、古い和服の布をアイヌ刺繍で重ねて、アイヌの物語を語れないか思いました。「目で見るとアイヌ叙事詩」という言葉が頭に浮かびました。語るべきアイヌの物語はどこにあるのか。私はコタンの守り神のシマフクロウの物語を絵にしたいと思い、探し始めました。そして、アイヌ・ユーカラに出会いました。2007年に『シマフクロウとサケ』という絵物語が完成しました。私はアイヌ刺繍と和服地で生み出す作品を古布絵と名づけました。

ユーカラで語られる物語では、さまざまなカムイが私たちに語りかけてくれます。私たちが人間としてどうあるべきか、万物とどうつながるべきかが物語という形で示されています。アイヌの叙事詩は私の体のなかを流れるアイヌの血をたぎらせてくれました。これこそが私たちの祖先が私たちに伝えてくれたアイヌの精神性なのだと思い落ちたのです。私が探し求めていたものが見つかったと思いました。

先祖が縄文の末裔として開花させた豊かな精神性は、長い植民地支配、同化政策の歴史のな

かで、次第に失われていきました。それでも、私の子供のころには、とうちゃんやかあちゃんが真剣にカムイノミをしている姿、近所の人たちがいろいろのまわりに集まって、夜を徹して食べて、飲んで、床が抜けんばかりにダイナミックに歌い、踊っていた姿を私は見ています。苦しい暮らしのなかで、アイヌであることを確かめ合う一瞬でした。しかし、それももう過去のことになりました。

いまの私たちの暮らしのなかで、アイヌであることに喜びを感じる瞬間がどれほどあるでしょうか。アイヌであることに喜びを感じる力は外から与えられるものではありません。自分の心から湧き上がってくるものです。いかに私たちが心までも近現代の日本によって収奪されているとしても、私たちがアイヌの血を受けついでいる限り、その力の萌芽は体のなかに眠っています。その芽を花として開かせてくれるものがアイヌのユーカラなのだと思います。

アイヌ・ユーカラはノーベル文学賞の候補にもなったと聞いています。それほど素晴らしいものを先祖は私たちに伝えてくれているのです。ユーカラを通して、私たちアイヌはアイヌの精神を取り戻す、アイヌの精神性を復興させたい、それがいまの私の一番の願いです。ウタリと共に、ユーカラを読み、その一部でも不十分なアイヌ語で語る、それがアイヌにとっての識字教育だと思います。そんな場が持てたらと思います。

10月に、「チャシ・アン・カラの会」が主催するアイヌ感謝祭が新横浜であり、そこで話をする機会がありました。そのときも、ユーカラの話をしました。「チャシ・アン・カラの会」は首都圏アイヌの集いの場を作ろうと首都圏アイヌの有志が立ち上げた組織です。首都圏には生活館がありません。私たちはそこから始めなければならないのです。東京の八重洲にはアイヌ文化センターがあります。しかし、これはアイヌ文化振興・研究推進機構の東京オフィスです。「チャシ・アン・カラの会」は、国や東京都に作ってもらうのではなく、自分たちの手で集いの場所を作りたいと思っています。アイヌが所有し、アイヌのために、アイヌが運営する集いの場所づくりを目指しています。

アイヌ感謝祭で、私のあとに、コンゴ共和国でゴリラの保護活動をしておられる西原さんという方がコンゴの先住民族ピグミーの話をされました。ピグミーは森で狩猟採集の暮らしをいまも続けている人々たちです。ゴリラの住む森はピグミーが住む森です。その森が人間によ

他の

って浸食され、どんどんと少なくなっているというお話でした。西原さんのお話でピグミーに興味を持って、本を読んでみました。そこにハチミツ採集の話が出ていました。ハチミツはピグミーにとって特別な食べ物で、彼らが森から離れられないのは森にハチミツがあるからなのだそうです。ミツバチが森のなかを飛び交うシーズンになると、ピグミーたちは何をあいてもミツバチの巣を探しに行きます。ミツバチの巣は発見した人の所有物になります。しかし、採取したハチミツは分かち合うという不文律があります。採った人だけのものではなく、みんなに分配するのです。分け与えるという行為が人々の絆、コミュニティの平和のいしづえとなっているのです。

これを読んで、私たちがユーカラで学ぶ世界が実際にいま生きられている、そのことに私は感銘を受けました。そして、私たちもユーカラから学ぶ、自然、カムイ、人間のあいだに存在する平等の精神を実践しなければならぬと思いました。いま世界には戦争や暴力の嵐が吹き荒れています。その世界に対して平等、平和を訴えることができるのは、戦争や暴力を生み出さない精神のシステムを持っている先住民族です。

戦争や暴力が日本でもひたひたと忍び寄ってきています。それに対してアイヌが立ち上がるには、アイヌの精神性の復興が必要です。これはアイヌ自身が取り組む問題です。でも、私たちの暮らしに余裕がなければ、ユーカラを読む時間もありませんし、ウタリと集うこともできません。

アイヌの生活を安定させるには国の政策が必要です。いまアイヌ政策づくりがアイヌ政策推進会議で行われていますが、6年たってもまだ最終案を正式に政府に提示もていない。それなのに、「民族共生を象徴する空間」という、妙な名前のついた箱ものの建設だけは既成事実として進んでいます。菅官房長官は、アイヌ政策推進会議で「オリンピックが2020年の7月24日から始まりますので、その前には完成させて、アイヌという先住民族について私たち日本としてしっかりと守り、そして、推進している姿を海外の皆さんにも見て」もらおうと思っていると発言しています。私は80年の人生のなかで、アイヌが政府によってしっかりと守られてきたという実感はまったくありません。大きな箱を作ることがアイヌを守ることだという、馬鹿々々しい考えにアイヌはついていけません。

ただ、その箱ものに「民族共生」という言葉をつけるのであれば、共生のあかしとなるこ

とも同時にやっていただきたい。施設のオープンにあたっては、国がアイヌ民族に対するこれまでの収奪に対して、しっかりとした言葉で謝罪していただきたい。それを受けて、カムイノミ、イチャルピカが行われる。そうなれば、この施設のオープンにも意義が生まれます。国の謝罪は多くのアイヌの心の癒しとなります。アイヌ民族と国との和解の第一歩となるはずで、この市民会議もぜひそのことを強く訴えて欲しいとお願いいたします。

最後に、2011年3月11日、大地震と大津波が東北を襲ったときに、私の心に言葉が浮かんできました。それを書き綴ったのが、「大地よ」という詩です。私の体に流れるアイヌ民族の血が私によませた詩だと私は思っています。聞いて下さい。

大地よ

--東日本大震災によせて--

宇梶静江

大地よ

重たかったか

痛かったか

あなたについて

もっと深く気づいて

敬って

その重さや

痛みを

知る術を

持つべきであった

多くの民が

あなたの

重さや 痛みとともに 波に消えて

そして

大地にかえっていった

その痛みに

今 私たち

残された多くの民が

しっかりと気づき

畏敬の念をもって  
手をあわす

今日この場で皆さんにお話しする機会を与えていただきましたことに感謝申し上げます。吉田先生、丸山先生、その他運営にたずさわっておられる方々に心からお礼を申し上げます。この市民会議が、その名の通りに、多くの日本の市民を巻き込んだ運動となって、真のアイヌ政策づくりが進むことを願って、私の話を終わらせていただきます。ありがとうございました。